

# 識字(読み書き)が自己を育ててきた

## 川上 博幸

人間の“獸性”が復活し出しているのではないかと、危惧している。身の回りの世間を見渡しても、自分というものを見失っている若者が、増えていると思えてならない。社会では、人間をモノとみなしていると考えざるを得ない状況が、ここまで深く蔓延してきているか、と震撼させられている。

幼女を連続殺害した、奥多摩のM事件、女子高校生をコンクリート詰めにした事件、愛知のアベック殺害事件、神戸のA少年事件、月ヶ瀬女子中学生ひき殺し事件、堺市のシナ少年の通り魔的殺害事件、黒磯市教師刺殺事件、寝屋川市の老女殺害事件等々、極めて凶悪で特異な事件が続発して、もはや少々の事件では驚かないぐらい人々の感覚は麻痺し出している。

こういう今日的な状況の、根本的な考察が急がれる。この点でも先進国であるアメリカで、何とか解明しようと研究と論考が続いている。それは、犯罪の解明であり、人間の探求であり、ひいては文明社会の変容の追求である。少数だがそのような著作が翻訳されていて、大部で読みにくいか、非常に刺激的で、ある種の知的興奮に駆られる。

例えば、1988年『アメリカン・マインドの終焉』(アラン・ブルーム著みすず書房)、1991年『声の文化と文字の文化』(W-J・オング著 藤原書店)、1992年『減びゆく思考力 子どもたちの脳が変わる』(J・ハリー著 大修館書店)である。この系譜に入る著作が秋に刊行された。『本が死ぬところ暴力が生まれる』(新曜社)がそれである。『沈黙の春』や『環境ホルモン問題』に匹敵する警世の書である。

映像文化が肥大して、活字文化を凌駕しているかに見える現代は、「声の文化から文字の文化」へ転換した、中世以来の大転換期であると言える。テレビ、映画、ビデオ、パソコン、といった映像、電子メディアは、「機能的非識字者」を大量に産み出しているという。識字(読み書き能力=リテラシー)は、「個」という一貫した“自己”をはぐくみ、自己意識を強固にしていく。そういう識字能力は、その前に「口承」(人の口から発せられる言葉、言葉によるおしゃべり)の段階を経て確実なものになる。しかるに、現在、親から十分言葉をかけられ、発する音声を十分受け取ってもらっていない子どもが増えている、おまけに、乳幼児期からテレビ、ビデオで子守をしてもらったため、活字が苦手で、文字を読むことがおっくうな子どもが出現してきた。こういう口承、識字の世界から無縁の子どもは、自己という概念が、意識の最も深いレベルで崩壊してきている。

アメリカでは、そういう若者が自己喪失し、何ら罪の意識なく、快楽的に殺人を犯している。テレビと銃がそれを助長し、感覚的にその表現手段となっている、著者はそう説いている。人間が文字を持つ以前の、口承で意志を伝達していた、前識字文化の時代から考察し、文字の発明、語る言葉のトリック性、電子メディア時代と人間の変容、識字の衰退と暴力の跋扈、と探求のメスは非常に鋭い。

確かに、我々人間が自分自身の世界観を持ち、文化を継承していくには、物語が非常に重要である。即ち自分を見つめ直し、自己を形成していくには、口承世界と識字世界の絶妙のバランスが必要である。著者は母性が育む口承世界の再認識、識字への道は口から始まる。家庭、家族と識字の原点にかえるべきだ、と主張している。私たち、仕事で図書に関わる人は、改めて読書の持つ重要性を深く認識し、“読む喜び”を知る人を増やしたい。(かわかみ ひろゆき)